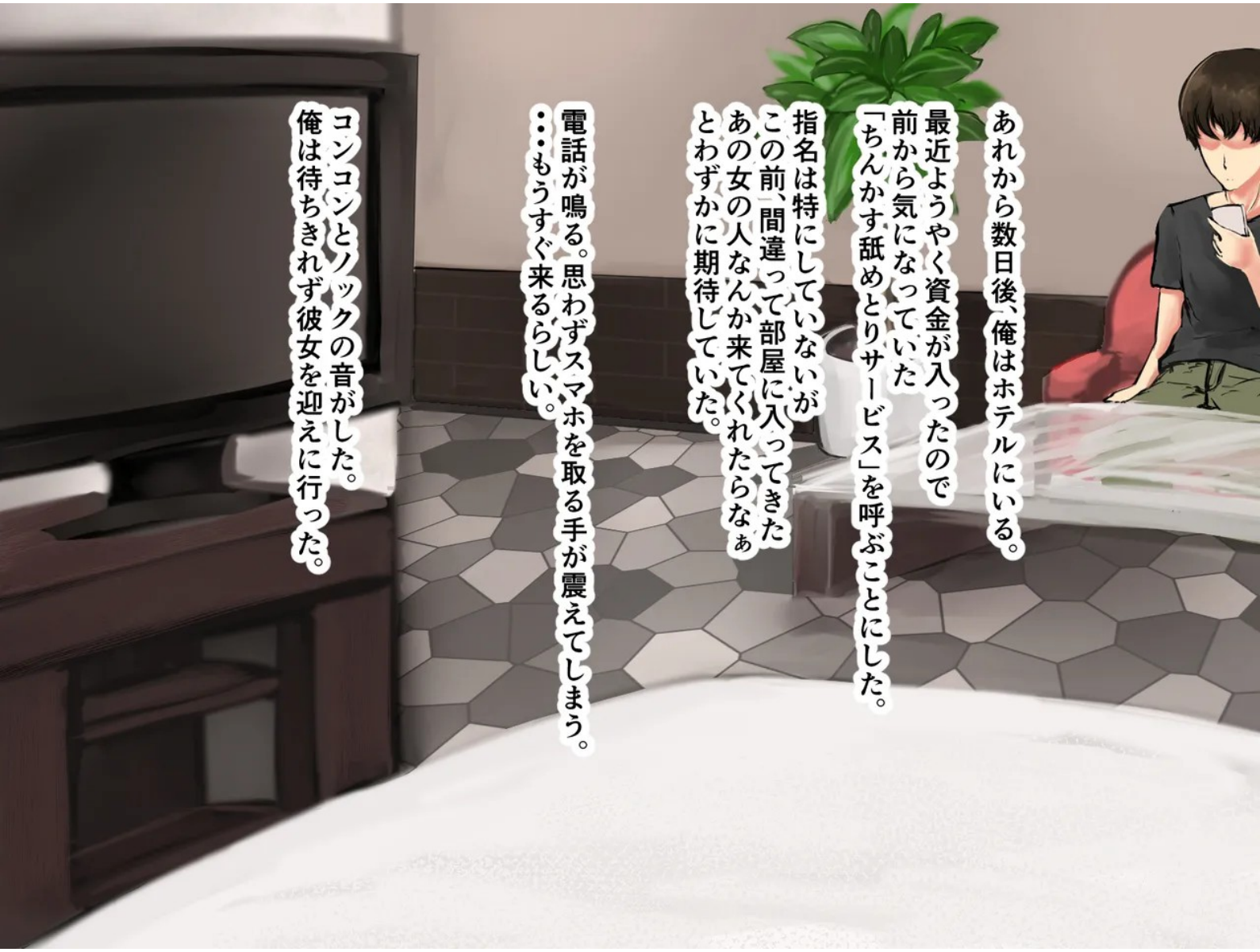
ちんかす舐めとり
サービス
呼んでみた4

ちんかす舐めとり
サービス
呼んでみた4

ピンポーン
午後7時ころ
ふいにピンポンが鳴る。
…誰だろう。
ドアを開けると女の人がいた。
「こんばんは～
ちんかす舐めとりサービスです。
○○さんのお部屋ですか？」
「いや…それ隣の人ですけど」

カァァ
「あっえ、…やばっ
ごめんなさいっ！」
間違いに気づいた女性は
真っ赤になりながら
しきりに頭を下げ、そして去っていった。
どこの誰なのかは分からないが
一目見た印象は「かわいいな」と思った。


あれから数日後、俺はホテルにいる。
最近ようやく資金が入ったので
前から気になっていた
「ちんかす舐めとりサービス」を呼ぶことにした。
指名は特にしていないが
この前、間違って部屋に入ってきた
あの女の人なんか来てくれたらなぁ
とわずかに期待していた。
電話が鳴る。思わずスマホを取る手が震えてしまう。
・・・もうすぐ来るらしい。
コンコンとノックの音がした。
俺は待ちきれず彼女を迎えに行った。

「こんにちはーちんかす舐めとりサービスです。」
「・・・あっ！どもっす」
思いがけない再会に
動揺してなんとも間抜けな挨拶をしてしまった。
少し恥ずかしい・・・
「失礼しまーす」
しかし、様子を見るに俺のことは覚えていなさそうだった。
まあ当然だろう。なにせ一瞬だったのだから。

「こういうのって初めてです?」
早々に服を脱ぎながら話始める彼女。
「え・・っと、はい。童貞です。」
いらないことまでしゃべってしまった。
「それに基本お客さんは
受け身で大丈夫ですよ。
ほらウチお掃除サービス
っていう体なので」
あ、体とか言っちゃうんだ
「それに会うの、
初めてじゃなくないですか~」
ドキッとする。
「そういう人結構いるので
気にしないでいいですよ~」
「えっ?」
「覚えてますよ~
私、人の顔
すぐ覚えちゃうんです」
覚えててくれたことに
動揺して顔が熱かった。
全くドギマギしっぱなしだ。

ドキドキ冷めやらぬまま
「サービス」前にシャワーを浴びるため浴室へ。
何故か俺はパンツだけ穿かされたまま来させられた。
「あ～おちんちん、おっきくなってますね。」
パンツ越しもみもみされる。
しばらくシャワーを浴びる様子もなくただ撫でられる。
ところで俺は童貞で「早漏」だ。
このままもぞもぞ弄られ続けていたら射精してしまう・・・

何も言わずもぞもぞとしていると
「もしかして、でちゃいます？」
どうやらお見通しのようだった。
「あ、あのこれ出しちゃったら終わりとかないっすよね」
心配になって聞いてみる。
こんなので終わったらもったいなすぎる。
「おちんちんのお掃除するまでは
出しちゃっても構わないですよ」
「それまでは射精し放題です。」
射精し放題、そのワードはヤバイ。
不安から一転、射精モードに入る。

「がまんしないでぴゅってしちゃいましょうっ」
動かす手ががっちりと股間を捉え射精を促すように激しくなる。
布にこすれる感触に女の人に手コキされているという事実が加わり
高揚感は一気に増してゆく。
金玉からぐんぐんと液が上がってきたような気がした。
「はぁ、ほぉらおちんちん出したいって言ってますよ～」
「ぴゅくぴゅくしてる～ほらイっちゃえイっちゃえ」
ビク
ビク

「うっ・・・くぁ、で、る。」
情けない声を上げながらパンツの中に射精をした。
パンツに染み広がっていく精液の生温かな感触がなんともいえない。
「あったかぁい。
これ結構でましたね。」
よしよしなんていいながら股間を撫でられる。
敏感ちんこには刺激が強い。
「う・・・ぁっ」
「あ、ごめんごめんそうだった。
じゃゆっくりパンツのほうを脱がしますね〜」
ゴムに手をかけゆっくりと当たらないように脱がされてゆく。

「わぁすっごーいこんなに出てたんですか～」
脱がした後のパンツにはべっとりと精液がついていた。
彼女はそんな俺のパンツを裏返しそこに付いた精液を
まじまじと見つめている。
「お風呂前の匂い・・すっごい」
くんくんと匂いを嗅ぎ、恍惚な表情のまま
次第にパンツに顔を近づけてゆく。
・・・え、まじで？

「じゅるじゅるっ」
驚いたのも束の間、彼女は精液をすすっていた。
「はふっ、ん…じゅるじゅる」
なおもすすり続ける様子に
俺のちんこは大きくなり始めていた。

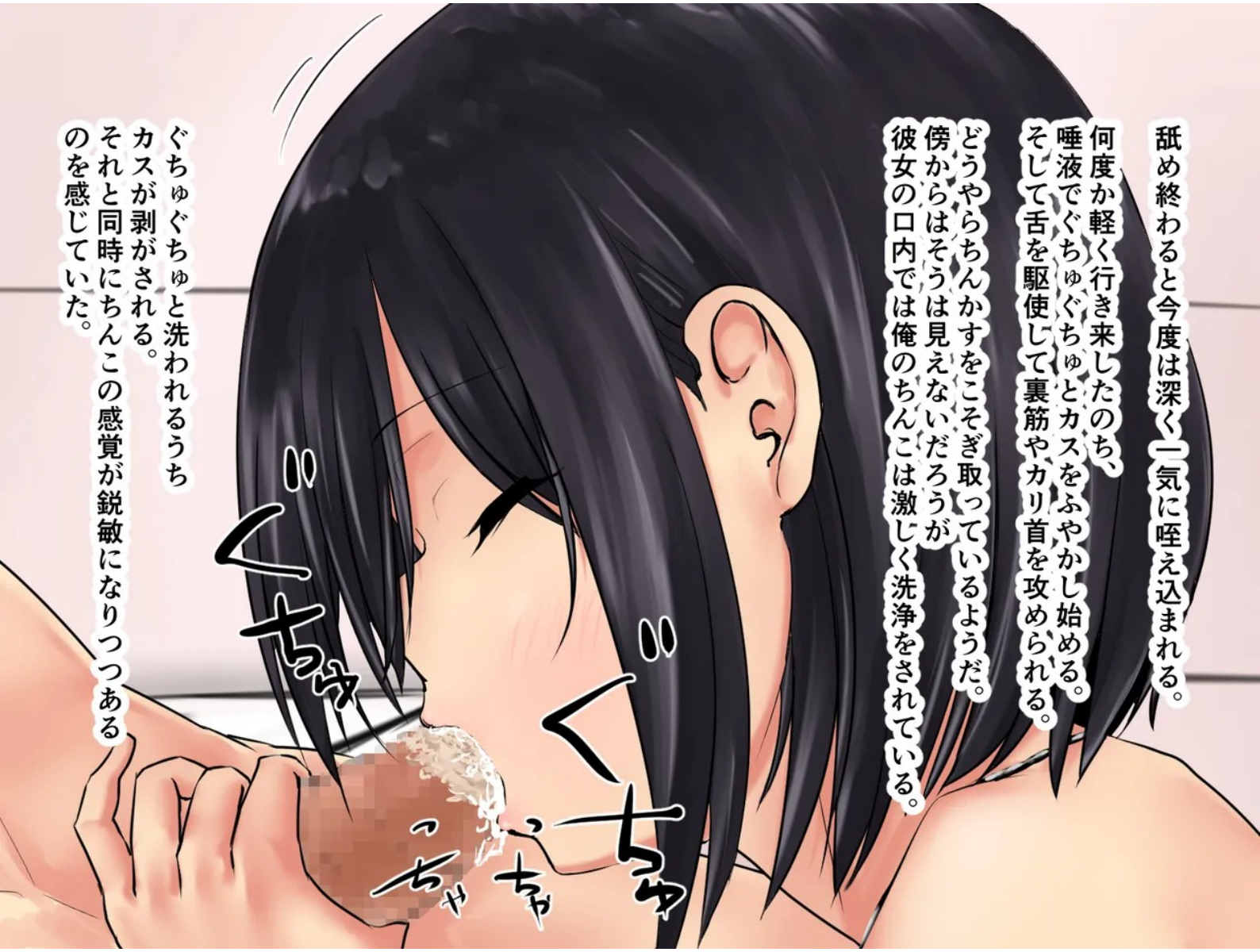
「ん…はぁ、結構濃いですね。
溜めてきたんですか？」
「ええ、まあ…はい。」
「おいしい精液ありがとうございます。」
彼女はいたずらっぽく笑った。
「おちんちんのほうもきれいにしないとですね。」
そう言うと彼女は俺を浴槽のヘリに座らせた。

「ザーメン、おいしそうでついつい飲んじゃいました。ごめんなさい、パンツのほうを先にきれいにしちゃって…」
「い、いや、でもちょっとびっくりしました。」すすんでやってる辺り彼女はどうやら精液が好きらしい。パンツの件はサービスということでいいんだろうか？
「それじゃおちんちん、剥いていきますね～」指がゆっくり皮を剥いてゆく。
しこしこ

剥かれると同時に悪臭がむわっと広がる。
しかし彼女はそれを嗅いでも嫌な顔もせず、
むしろ恍惚な表情を浮かべている。
「これいいですねっ。私、これ好きです。」
すんすんと香りを楽しむ彼女。
俺は若干引いていた。
「へ、へえ…そうすか…」
「こういう雄臭いちんかすってあんまりないんで
…あぁ～ヤバイ、好き。」
しゃぶ
さすがはちんか舐めとりサービス。
こういう人がいるからこそやっていけてるんだろうな。
と感心してしまう。
「あ、おちんちん失礼しますね。」
思い出したかのように彼女は亀頭に顔を近づけてゆく。

温かいしっとりとした吐息がさきっぽにかかり
ちんこがより一層ガチガチ勃起をしてしまう。
「いただきます。」
小さく彼女が呟く。

唇と舌が亀頭に触れる。
おぉっ！
これがフェラチオなのか。
彼女は裏筋を舌で舐め回している。
これが生身のちんこであったら
楽しむ前に射精していただろう・・・
ちんかすに感謝だ。
にゅり
にゅり


舐め終わると今度は深く一気に咥え込まれる。
何度か軽く行き来したのち、
唾液でぐちゅぐちゅとカスをふやかし始める。
そして舌を駆使して裏筋やカリ首を攻められる。
どうやらちんかすをこそぎ取っているようだ。
傍からはそうは見えないだろうが
彼女の口内では俺のちんこは激しく洗浄をされている。
ぐちゅぐちゅと洗われるうち
カスが剥がされる。
それと同時にちんこの感覚が鋭敏になりつつある
のを感じていた。
じゅくちゅ
じゅくちゅ
ちゃ
ちゃ

「う～ん
裏が結構溜まってますね。」
さきほどのフェラで
あらかたふやかし終わったちんかすを
今度は裏筋を重点的に掃除してゆく。
裏筋は取れてきたものの
残り大部分のカスが残っている。
「うんとー
それじゃ
残りは本洗いで取っちゃいますね」

「この裏面がざらざらのコンドームを付けて本洗いをします。」
浴室で一通り終えたあとベッドに移動。「本洗い」の説明を受けていた。
「一応、膣内に挿入れるんですけどあくまで「お掃除」なんで・・・」
「最近本番出来る言ってろくにちんかすも溜めないで来る人が多くって・・」
「大変なんですね」
「なのであんまりヤれる、とかは言わないでほしいな～って」

「ゴムのサイズ大丈夫でした？」
「はい、オッケーっす」
「そっか、じゃ入れていきますね～」
くにくにと柔らかいところにあてがわれ、彼女の入り口に先っぽが入ってゆく・・・
くにくにくに
興奮が高まる中、彼女はゆっくり腰を下ろし始めた。

ほどよい膣圧を感じながら
根元のほうまでずっぽりと挿入される。
「ん～…はいったぁ～」
「どうですか？
おちんちん」
ゴム越しにじんわり体温が伝わってくる。
「あぁ…なんか感動っす…」
「初めてだもんね
卒業おめでと～」
心地よすぎる刺激に
彼女の膣内でとろけそう
になる
「これからゆっくりこすっていく
ので痛かったら言ってくださいね」

彼女が動き出す。
先ほどまでのほどよい感覚を保ちつつ、
適度な刺激がちんこにくる。
「どうですか～？痛くない？」
「い、いえ、気持ちいいっすっ」
彼女が動くたび
ちんことゴムがこすれカスが
ゴリゴリ落ちていくのが分かった。
徐々にスピードが上がる。
彼女の腰が打ち付けられ、体液の
粘性のあるエロい音がこだまする。
そんな音や感触を感じるたびに
今、自分はセックスをしているんだ
というリアルをかみしめる。。
「あっなんかおちんちん最初より
おっきくなってきてるっ」
感慨にふけるも、限界が近い・・・
気持ちが高ぶり過ぎたせいで
もう射精しそうになっている。

彼女がふと動きを止めた。
彼女の息が上がっている。
気付くとお互い汗だくになっていた。
「なんかおちんちん相性よくて興奮しすぎちゃいました。」
道理で激しいわけだ。
「ふだん滅多にイかないんだけど今日はちょっとイキそうかも…」
彼女の目はとろけている。
「ねえ、口開けて」
ハァ ハァ

!?!
レロォ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅぱ
んっ
んっ
んっ

彼女から口を離す。
お互いの口から糸が引いていた。
「っ・・・ぁ、キス、しちゃいました。」
「今のは童貞卒業祝いのサービスということで・・・」
「え・・・」
「さてと、ラストスパートいきますので思いっきり射精しちゃってください。」
はぁ
はぁ

繋がったまま体を起こすと
彼女は再び腰を動かす。
宣言通りのラストスパート
一気にギアを上げる。
さっきよりも激しい動きのためか
愛液が泡立つ。
「んっ……んっ」
小さく声を漏らす彼女。
仕事でセックスをしている手前
先にイクのをこらえているのだろうか
だとすれば自分も早く出さなければ
今まで受け身でいたが
自分から彼女のまんこを
突き上げるように動かす。
んっ
んっ
ヌチュ
ヌチュ
ぴちゃ
ぴちゃ
ギッ
ギッ

「あっ…うごいちゃっ、あんっ」
「ん…もう、受け身でいいって言ったじゃないですかぁ」
「気持ちいいとこ、あたってあぁっ」
はぁはぁ
彼女のピストン運動に負けじとこちらも突き返す。
性器どうしが激しくこすれあう。
あぁっ来るっ
限界が近い。
「…ッぁ、出るっ！」
せりあがった精液が尿道を駆け巡る。

ん〜〜〜
どくどくと脈打つちんこ。
俺は射精した。
彼女の膣内がきゅぅっときつくなる。
「はぁ、はぁ、
イっちゃい、ました…」
二人して体をぴくぴくさせながら
しばらく余韻に浸っていた。
ブル
ブル
ビクン
ビクン
ビクン
ドクドク
ピク
ピク

「ほらちんかすいっぱい」
コンドームに溜まったものを眺め
またもうっとりとした表情を浮かべている。
すると、ためらいなく
コンドームから
精液とちんかすの混合液を絞り出し
舌の上に流し込んだ。
「あ～ほいひっ…んくっ、
…っはぁ、これでお掃除完了です。」

「今日はありがとうございました。」
「いえいえこちらこそすっごくおいしいちんかす頂いちゃって」
「私の好みのおちんちんなので今度からはぜひ指名してもらいたいな～って」
「！わかりました！ぜひ指名させていただきます！」
変なテンションの俺を彼女はくすっと笑う。
「うん、それじゃ、ご利用ありがとうございました～」
またね～と手を振る彼女を見送りながら今日一日を振り返る。
・・・・
・・・あれ、今日色々やってきたけどそういえば彼女の名前聞いてなくないか？大変なことに気づいた俺は急いで彼女を追いかけた。
おわり

ピンポーン

おわり